

2025

10

No. 749

國學院大學学報

「焚きあまし」
庭の面^{おもて}にかり乾す葉の
香もほの^{しら}に、西日のひかり
あた、かくさす
『海やまのあひだ』
釈 迢空

国学院大学 令和7年10月20日(月) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
[発行]国学院大学 [編集]総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話]03(5466)0130 [FAX]03(5466)0528

祭 儀 ■ 創立記念祭 11月1日(土) 午前10時 神殿 ■ 関係物故者慰霊祭 11月1日(土) 午前11時30分 百周年記念館記念講堂

本学で培った つながり から

現代社会を生き抜く

協働の力を育む

由学級づくりを目指す

横浜市立上寺尾小学校 5年2組担任
渡瀬将二郎さん(平25卒・121期初教)

院友
Interview

戦前から中等教育を中心に数多くの教員を養成してきた本学は「教職の国学院」ともいわれ、その実績と伝統を継承し、小学校教員や保育者、スポーツ指導者などの養成を軸に平成21(2009)年に開設されたのが人間開発学部だ。

令和6(2024)年、日本人の出生数は約68万6000人と戦後初めて70万人を割り込んだ。急激な少子化と人口減少は国難レベルと表現できる。一人一人が存分に力を発揮し、活躍できる社会の実現と、その土台となる「人づくり」への関心が高まっている。人間開発学部とそこから巣立った院友(本学卒業生)人材に寄せられる期待はますます大きくなっていると思われる。

現在、横浜市立上寺尾小学校(鶴見区)で教員をされている渡瀬将二郎さんは人間開発学部の第1期生だ。新設学部で頼れる先輩がいない環境には不安もあったが、大学は学生の声を大切にし、常に寄り添ってくれた」と振り返る。予困難な現代社会を生きるには他者との協働が不可欠である。学校は子ども同士が「つながる」ことで、協働の力を身に付ける場だと渡瀬さんは強調する。大学時代のゼミナールでは「学級づくり」を研究し、その学びが現在でも力となっている。多忙な職務の傍ら、横浜市学校院友会の副会長としても活躍。年代は違っても、同じ大学で学んだ仲間との存在を感じられることが、日々の頑張りを生む活力だと話す。

4・5面に続く

杉子女王殿下とともに学生らが稲刈り
コメ作りワークショップで日本文化に触れる

杉子女王殿下(前列左から3人目)と稲刈りを行った参加者ら

杉子女王殿下が総裁を務められる一般社団法人心游舎が主催している「新潟コメ作りワークショップ」の稲刈りが、10月5日に新潟市北区の田んぼで行われ、在学生11人、教員1人、院友(本学卒業生)らをはじめ、協力農家、地元住民など約60人が参加した。

このワークショップは、コメ作りの体験を通して、日本の文化と歴史に触れる機会として毎年実施されている。今年も地元農家の協力を受けながら学生たちが田植えや草刈りを体験した。

当日、参加学生たちは伝統的な農作業服である「やまぎもん」に着替え、田んぼへ集合。協力農家の方から稲の刈り取り方について説明を受けた後、実際に刈り取りに挑戦した。学生たちは、はじめての作業に苦戦する様子も見られたが、

協力農家の方々や院友の助言を受けながら作業を進めた。刈り取った稲を「まるけ」と呼ばれる、わらを使って束ねる作業でまとめ、天日干しのため「はさ」と呼ばれる木組みの柵にかけた。

前日の雨でぬかるんだ田んぼに足を取られながらも、参加者全員で約2時間の稲刈りを終えると、最後に田んぼに残った落ち穂を拾った。

稲刈り後は公民館に移動して参加者全員で振り返りを実施。学生からは「初めての稲刈りは大変だったが、日本の食を支える作業の重みを感じた」「地域の文化や人との温かい交流が、何よりも貴重な体験になった」と感想があがった。

収穫されたコメは今後、大國魂神社(東京都府中市)へ奉納される予定。

みはるかすもの

芸術の秋。美術館や博物館に出かけていて逸品に出会ったとき思わず、「ほう」と声が漏れた経験をした人もいるだろう。連れ立って出かけた誰かと、ひそひそと感想を語り合った経験もあるかもしれない。だがその声がいつの間にか大きくなると、部屋の隅から係の人が飛んでくる▼今村信隆「お静かに!」の文化史 ミュージアムの声と沈黙をめぐる(文学通信、2024年)をひもとくと「美術館等のミュージアムは、コレクションを私的な所有物としてではなく、共有の財として分けもつことを前提とする近代的なシステムである」とある。私たちは私的な感性と公の領域のあい

だで黙ったり、声に出したりを繰り返しているのだ▼続編である『お静かに!』の誕生 近代日本美術の鑑賞と批評(同、2025年)はさらに強烈だ。明治期に入って「博覧会」が催されるようになるも、当初は前近代的な「見世物」の身体性が流れ込む。描かれた浮世絵からは「談笑の場」であったことさえ読み取れるという。「視覚に基づく知を目指して出航しようとする博覧会」という近代的装置の船底に、近代以前の見世物が含んでいた声や音の伝統がびっしりとこびりついている▼ミュージアムで思わず声を漏らす私たちの体は、近代と前近代のあいだでいれんしている……などと表現したら、いいすぎだろうか。ともあれ、この秋はどこかのミュージアムに出かけ、逸品とともに自他の態度を鑑賞してみるのも面白い。

主な内容 2面/大蔵流狂言 山本東次郎「狂言の会」 3面/「指定寄付金」ご芳名 4・5面/子ども同士をつなぐ学級づくり より良い社会に変えていく協働の力を育む 6面/人間開発学会第17回大会 研究成果と知見を共有

最終面から K:DNA I面/荒川選手 世界ジュニア 個人銀、混合団体金 国内大会でも3選手が入賞 II面/ゼミやインターンシップで経験を重ね、高輪ゲートウェイシティのまちづくりに参加

大蔵流狂言 山本東次郎師「狂言の会」 人間の「愚かしさ」への限りない愛情を「引き算」で描く伝統の芸



音曲聲を披露する山本東次郎師（右）

日本の伝統芸能である狂言に親しんでもらおうと、人間国宝で院友の大蔵流狂言・山本東次郎師（昭和36卒・69期文）らによる「狂言の会」が10月9日、10日にたまプラーザキャンパスで開催された。26回目となる今回は両日合わせて約730人が参加した。9日は午前と午後の2部構成で実施。午前の部は、たまプラーザキャンパス近隣の小学校4校から6年生約400人を招き、小学校の国語の教科書にも掲載されている大蔵流の「柿山伏」を上演した。午後的一般上演では、「昆布売」「舟船」「鎌腹」の三つの演目が披露された。上演後には東次郎師から

演目の解説が行われたのち、小舞を披露すると会場は拍手に包まれた。10日は第一演目として東次郎師がシテ（主役）を務める「音曲聲」が披露された。シテの舅が世間知らずのアド（脇役）の聲から智入りのあいさつを受ける。でたらめな作法を教えられた智の振る舞いに戸惑いつつ、恥をかかせまいと奇妙な作法に付き合う舅との掛け合いが見どころだ。滑稽さの中に深い人情がにじみ、客席に温かな笑いが広がった。続く「仏師」はシテのすっぱ（詐欺師）が都に出てきたアドの田舎者をだまそうとして逆に翻弄される物語。最後の「蝸牛」ではアドの主から長寿の薬とされるカタツムリを探してこいと命じられた太郎冠者（アド）が、カタツムリが何かを知らず、やぶで寝ていたシテの山伏をそれと間違える。カタツムリのふりをした山伏が「でんでんむしむし」と繰り返すユーモラスな囃子物に客席も大いに盛り上がった。上演後の解説では、東次郎師が「狂言は人間の愚かしさを描いているが、決して駄目だとは言わない。人生は楽しい、生きる価値があるという思いを込めた人間賛歌だ」と説明した。また現代人が失いつつある礼節と、謙虚であることにより不必要な摩擦を避ける「引き算」の文化を守っているのが狂言だと強調した。観客との質疑応答では足袋の色や面の持つ意味などに関する質問が寄せられた。舞台の言葉が分かりやすいのは現代風に変えているからかという問いには、東次郎師が「曾祖父が作った台本のまま変えていないが、常に『初めてしゃべる』という心構えをしている。それで言葉が現代風にも聞こえるのではないか」と答えると、満員の客席に大きな共感を呼んだ。最後に司会の学生から東次郎師に花束が贈られた。

合同企業セミナーを開催



合同企業セミナーの初回が、10月8日に渋谷キャンパスで開催された＝写真。本催しは学部生および院生（卒業・修了年次を除く）を対象に、大手・優良企業約60社の採用担当者から業界や会社の説明を直接聞き、理解を深めることを目的に、毎年実施している。会場では企業の紹介のほか、既に内定を得た在学学生が、自身の就職活動について語る場面もあり、参加した学生からは、「企業の理解が進んでよかった」「もっと多くの企業の話を聞きたい」などの感想があがった。

若木育成会が支部長研修会を開催

若木育成会全国支部長研修会と情報交換会が9月27日、渋谷キャンパスで開催された。研修会では、仙北谷穂高大学事務局長が「各支部での活動を通し、本学の教育・研究活動への引き続きのご支援をお願いしたい」とあいさつ。校友課により、若木育成会の年間スケジュールや、キャンパス見学会の説明、来年度の支部の集いの実施マニュアルをもとにした研修が行われた。情報交換会には有栖川宮記念ホールで行われ、半田りえ子・若木育成会会長のあいさつの後、支部長たちがそれぞれの支部活動や学生たちの日常について話し合い、交流を深めた。

9月卒業・修了 学部65人、大学院7人



国学院大学の令和7年度9月卒業生・修了生が9月30日付で確定し、学部65人、大学院博士前期課程7人が卒業・修了を迎えた。9月24日に渋谷キャンパスで行われた文学部卒業証書授与式では、谷口雅博・文学部長（同教授）が祝辞を述べ、卒業生一人一人に証書を手渡した＝写真。大学院9月修了学位記授与式も同日に渋谷キャンパスで行われた。佐藤長門・大学院委員長（文学部教授）による祝辞の後、修了生一人一人に対して、指導教員から論文講評が述べられ、併せて今後の進路に向けてはなむけの言葉が贈られた。卒業期は134期となり、学部の学位記授与式は令和8年3月22日、大学院は3月21日に開催される予定。所属別の卒業生・修了生数は次の通り。◎大学院▶博士前期課程◇文学研究科▷文学専攻3人◇法学研究科▷法律学専攻1人◇経済学研究科▷経済学専攻3人◎学部▶文学部16人▷哲学科1人▷史学科8人▷日本文学科4人▷中国文学科2人▷外国語文化学科1人▶経済学部16人▷経済学科7人▷経営学科9人▶法学部15人▷法律専攻14人▷政治専攻1人▶神道文化学部▷神道文化学科7人▶人間開発学部11人▷初等教育学科2人▷健康体育学科6人▷子ども支援学科3人

教職員人事

【採用】◆大学事務局◇嘱託▷板屋凜（教学事務部教育開発推進機構事務課）（令和7年10月1日付）【退職】◎自己都合◆大学事務局◇専任▷細井堯之（総務部人事課主任）（令和7年9月30日付）▷鈴木綾華（たまプラーザ事務部たまプラーザ事務課書記補）（令和7年8月31日付）◎期間満了◆大学事務局◇嘱託▷曾根田勉（たまプラーザ事務部たまプラーザ事務課）（令和7年9月30日付）

国際交流歓迎会を開催



冒頭、田原裕子・国際交流推進部長（経済学部教授）が登壇し、「多くの留学生を迎えることができ、大変うれしく思う。支援する学生やフレンドシップファミリーと交流を深めながら、本学で多くのことを学んでほしい」とあいさつした。続いて留学生が日本語で自己紹介を行い、本学で学びたいことや日本について興味を持っていることなどを話すと、参加者たちは拍手で歓迎の意を表した＝写真。その後、お題の特徴にあてはまる人を探す「I know a person who」というゲームや食事を楽しみながら歓談し、終始和やかな雰囲気の中で交流した。今後は「International Coffee Hour」やフィールドトリップなどのさまざまな交流イベントを通して、留学生生は在学生や教職員と互いに学び合い、親睦を深めていく。

「蔦屋重三郎と江戸のベストセラー」講演会を開催 ～中村正明教授が解説、渋谷区との地域連携事業として～



国学院大学と渋谷区立図書館との連携事業として、9月3日、中央図書館で講演会「蔦屋重三郎と江戸のベストセラー」が開催された。文学部の中村正明教授が講師を務め、同館利用者らおよそ40人が聴講した＝写真。講演で中村教授は、江戸時代の本屋が仏書や儒書などを扱う「書物問屋」と、娯楽書を扱う「地本問屋」に大別されていたことを説明。続いて、現在NHKで放映中の大河ドラマの主人公として知られる「地本問屋」の版元・蔦屋重三郎がいかに企画力やプロデュース力にたけた人物だったかを解説した。後半は、江戸で出版された娯楽性の高い読み物「江戸戯作」特に滑稽本「東海道中膝栗毛」に焦点を当てた。同作品は「江戸時代のベストセラー」として多くの続編や模倣作を生みだし、川柳や歌舞伎などさまざまなジャンルにも影響を与え、その流れが後世にまで続いたと述べた。最後に中村教授は「今も昔も、人気が出る本には共通点がある。江戸時代の文学には今に通じる面白い世界が広がっている。関連図書が渋谷区の図書館にも所蔵されているので、ぜひ手に取ってほしい」と呼びかけた。

経済学部「E-Tour」 高校生が一日大学生活を体験



経済学会学生委員会主催の高校生向け体験企画「E-Tour」が9月20日、渋谷キャンパスで開催された。この企画は、高校生が模擬授業やキャンパスツアーを通し経済学部生の一日を疑似体験する催しで、学生委員が毎年企画・運営を担当。今回は約30人が参加した。まず芳賀英明・経済学部准教授が学部の特徴を説明。その後、学生が進行役を務め、学科紹介、キャンパスツアー、模擬授業を実施した=写真。キャンパスツアーではクイズに挑戦しながら巡り、模擬授業はアクティブラーニング形式のグループワークを行うなど、一日大学生生活を楽しんだ。

ミュージアムトークを開催



国学院大学博物館特別展「アイヌモシリーアイヌの世界と多様な文化―」の関連企画として、ミュージアムトークが9月20日に開催され、会場には100人以上の来館者が集まり、熱心に耳を傾けた。

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター長の佐々木利和氏（昭51卒・84期文2）が「描かれたアイヌの人々」をテーマに講演を行った=写真。佐々木氏は、アイヌ文化や歴史について資料を交え簡潔に説明し、アイヌ文化を題材とした多様な絵画資料を解説した。アイヌ絵を見る際には、「描いた人が誰で、どのような状況で描いたか」を正しく把握することが、アイヌ文化を理解するうえで重要だと述べた（同展は9月23日に終了）。

【お詫びと訂正】

国学院大学学報748号3面「花堂靖仁名誉教授 逝去」の記事における退職理由について誤りがありました。お詫び申し上げますとともに、以下のとおり訂正いたします。

「花堂靖仁名誉教授 逝去」2段落5行目

誤 ～平成15年3月定年により退職。

正 ～平成15年3月自己都合により退職。

「指定寄付金」 ご芳名

令和7年度 指定寄付者一覧(敬称略)

令和7年4月1日～9月30日（単位：円）

寄付者	寄付目的	寄付金額	収納日
テルヤ電機株式会社代表取締役社長 江川 和宏	学生・生徒等の活動支援（アルティメット部）	1,000,000	令和7年4月 1日
勝村 溪太	学生・生徒等の活動支援（森木会）	60,000	令和7年4月 7日
わかみこ会代表 湊 明	学生・生徒等の奨学基金	50,000	令和7年4月 7日
廣瀬 清	教育・研究振興支援	50,000	令和7年4月 8日
国学院大学生生活協同組合代表理事 手塚 俊一	施設・設備充実支援（神殿造替工事）	300,000	令和7年4月11日
匿名	学生・生徒等の活動支援（久我山中学・高等学校）	5,000	令和7年4月11日
		5,000	令和7年5月15日
		5,000	令和7年6月17日
		5,000	令和7年7月17日
		5,000	令和7年8月21日
		5,000	令和7年9月25日
坂口 翔颯	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部）	540,000	令和7年4月14日
栗原 彰	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	10,000	令和7年4月14日
清水 理江子	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和7年4月22日
		5,000	令和7年5月22日
		5,000	令和7年6月23日
		5,000	令和7年7月23日
		5,000	令和7年8月22日
		5,000	令和7年9月24日
關橋 淳	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部）	2,000	令和7年4月22日
		2,000	令和7年5月22日
		2,000	令和7年6月23日
		2,000	令和7年7月23日
		2,000	令和7年8月22日
		2,000	令和7年9月24日
寺嶋 将	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和7年5月 9日
臼杵 千枝子	学生・生徒等の奨学基金（国学院大学北海道短期大学部）	5,000	令和7年5月 9日
	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部・陸上競技部）	400,000	令和7年5月21日
田中 郁子	教育・研究振興支援	2,000	令和7年5月22日
		2,000	令和7年6月23日
		2,000	令和7年7月23日
		2,000	令和7年8月22日
		2,000	令和7年9月24日
深田 将弘	学生・生徒等の活動支援（モーターボート水上スキー部）	10,000	令和7年5月22日
	学生・生徒等の奨学基金	1,000,000	令和7年5月30日
一般財団法人国学院大学院友会会長 吉田 茂穂	施設・設備充実支援（140周年記念事業 神殿竣功）	500,000	令和7年5月30日
	教育・研究振興支援（学術スポーツ振興資金）	100,000	令和7年5月30日
	学生・生徒等の活動支援（第29回全国高校生創作コンテスト）	100,000	令和7年5月30日
	学生・生徒等の活動支援（第21回地域の伝承文化に学ぶコンテスト）	100,000	令和7年5月30日
	施設・設備充実支援	10,000	令和7年6月 9日
井田 豊久	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	1,000,000	令和7年6月13日
関根 俊	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	10,000	令和7年6月13日
神保 和憲	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	10,000	令和7年6月13日
国学院大学人間開発学会	学生・生徒等の奨学基金	9,629,629	令和7年6月16日
牧内 りずむ	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和7年6月23日
喜多山 健二	学生・生徒等の奨学基金	100,000	令和7年6月23日
山本 周典	学生・生徒等の奨学基金	5,000	令和7年6月23日
高橋 理沙	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	30,000	令和7年6月23日
伊藤 直記	学生・生徒等の活動支援（陸上競技部）	20,000	令和7年6月23日
田中 美代	教育・研究振興支援	10,000	令和7年6月23日
園田 治穂	学生・生徒等の活動支援（国学院大学体育連合会吹奏楽部）	30,000	令和7年6月23日
矢澤 敏司	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和7年7月 2日
山下 健太郎	教育・研究振興支援（研究開発推進機構）	20,000	令和7年7月14日
	学生・生徒等の活動支援（国学院大学全学応援団）	10,000	令和7年7月31日
特定非営利活動法人アクティブスポーツ理事長 小島 光顕	施設・設備充実支援（相模原グラウンド営繕）	60,000	令和7年8月 5日
株式会社アルフ代表取締役 實川 利光	学生・生徒等の奨学基金	60,000	令和7年8月 5日
館岡 裕	施設・設備充実支援	10,000	令和7年8月 7日
匿名	学生・生徒等の奨学基金	1,000,000	令和7年8月29日
神社本庁総合研究所所長 田中 恒清	教育・研究振興支援（研究開発推進センター）	600,000	令和7年8月29日
株式会社アローズ・ケイ・渋谷 代表取締役 城所 俊哉	学生・生徒等の奨学基金	60,000,000	令和7年9月 5日
水谷 健介	教育・研究振興支援	10,000	令和7年9月 8日
宮沢 和季	学生・生徒等の奨学基金	1,000	令和7年9月24日
柴野 悠樹	学生・生徒等の奨学基金	10,000	令和7年9月24日
昱株式会社代表取締役 中川 崇	学生・生徒等の活動支援	50,000	令和7年9月29日
国学院大学院友経済会会長 橋本 憲市郎	学生・生徒等の活動支援（経営学科開設20周年記念事業）	700,000	令和7年9月29日
国学院大学硬式野球部後援会会長 塙 東男	学生・生徒等の活動支援（硬式野球部）	4,142,065	令和7年9月29日

校歌の作曲と、その曲調―

本居長世没後80年

学園ノ道 第71回

本学校歌の作曲は、童謡作曲家として名高い本居長世が手がけた。長世は、昭和20（1945）年10月14日に60歳で没し、今年で80年となる。

校歌の曲調について、本学の『八十五年史』には「曲は優雅であって軽快、行進の用にも供し得る」、「『百年史』には「曲は優雅にして荘重なものである」と評されている。その一方で、「我が校歌の作曲がどのような経緯により担当されたものであったか史料を欠き明らかでない」と、その経緯について判然としない。

作曲について10年前の学報（第641号）によると、長世の研究者である松浦良代氏の談話を踏まえ「長世の全盛期である大正10年から13年に作られた曲の一つに本学校歌がある。長世の祖父・本居豊穎（大正天皇の侍講を務めた国学者）が本学で講師を務めたことから長世を抜てきしたのだ。幼少期に豊穎から国学の教えを受けていた長世は、大変喜んだ」とある。

豊穎は、言わずもがな金田一京助の長男である。京助は校歌作曲当時教授として本学に在職していた。おそらく京助と長世は見知り合いであったであろう。長世の生誕百年を記念して、春彦が世話人の会長となり昭和60（1985）年に目黒不動尊に記念碑（十五夜お月さんの碑）が建立された。除幕式のこと学報（第304号）でも報じられているが、建立の報告書などは、春彦から本学にもたらされており、そこには協賛者として本学の名も記されている。

校歌の作曲に長世が「抜てき」された理由は「史料を欠き明らかでない」が、本学との深い所縁あつてのことと推察される。

研究開発推進機構准教授 渡邊卓



京音楽学校

働の力

を育む

院友
Interview

横浜市立上寺尾小学校 5年2組担任

渡瀬将二郎さん (平25卒・121期初教)

Profile

わたせ・しょうじろう

静岡県富士市出身。静岡県立富士宮北高校でソフトテニス部の主将を務め、春の全国高校選抜大会、夏の全国高校総体（インターハイ）に出場。平成21（2009）年、国学院大学人間開発学部初等教育学科に第1期生としてスポーツ推薦入試（ソフトテニス部）で入学。「よこはま教師塾アイ・カレッジ」の第1期生として特別選考枠で教員採用試験を受けて合格。横浜市立川上北小学校、横浜市立綱島小学校を経て、令和7年度から現在の学校で勤務。

——小学校教員を目指そうと考えたきっかけは
静岡県富士市の小学校6年生の時に担任教員と出会ったことが、大きなきっかけとなった。とても熱心な先生で、子どもを大切にしている姿勢がよく伝わってきた。小学校3年生の頃に始めたソフトテニスの練習が毎日19時から21時までであり大変だったが、いつも気にかけてくださり、たくさん褒めていただいたことで、勉強もテニスも両方を頑張れるという自信がついた。「小学校の先生になりたい」という気持ちを芽生えさせてくれた私にとっての恩師だ。

——人間開発学部の開設初年度、第1期生で飛び込んだ。なぜ国学院大学で学ぶと考えたのか
私はスポーツ推薦で入学した。ソフトテニス部が強く、かつ小学校の教員を目指せる大学を探していたが、希望に合う大学は少なかった。そのような中、国学院大学に新しく人間開発学部が開設された。同時にソフトテニス部が大学から「強化部会」に指定され、選手育成に力を入れていくこ

とになった。私にとっては運命的な出会いだった。学生の声を大切にしてくれるという記憶も鮮明に残っている。学部ができたばかりで、頼りになる先輩がいない環境に不安もあったが、例えば実際に教育現場に出て学んでみたいと希望すると、すぐに教育ボランティア先を探してくれるなど、大学として一人一人の学生にとことん寄り添ってもらえたことがありがたかった。

——大学2年生から大学が始めた教育インターンシップに参加したのは
入学後1年間の学びを経て、教員として働く現場を実際に見てみたいという思いが強くなっていった時、教育実践総合センターの小笠原優子・人間開発学部教授（特別専任）にボランティア活動ができる学校を紹介していただいた。当時はまだ誰もボランティアやインターンシップに参加する時代ではなかったが、思い切った現場に飛び込み、大学4年生まで横浜市内の小中学校でクラブ活動・部活動や授業の補助、宿泊体験学習の引率などに取り組ん

教員を目指す身として
運命的な出会いだった本学への入学

だ。子どもたちと関わり、大学生ながら「先生」と見られることで、教員として働く現場の実感に触れた。——あえて学外にまで学びの場を求めていったのはなぜか
教職の世界でよく言われることだが、20年から30年のキャリアがある経験豊富な教員も、大学を卒業したての新任教員も担任としてクラスに責任を持ち、同じ職務を担う。3年後にはそのような世界に入っていくことを考えると、怖さがあった。いち早く、教員の仕事を実際に見て学びたいと思った。

横浜市の大勢の熱心な先生方との出会いをきっかけに「横浜の先生」になりたいと考えるようになり、大学3年生では横浜市が運営する「よこはま教師塾アイ・カレッジ」に第1期生として入塾した。横浜市の目指す教育とは何かをしっかりと学べ、同じ横浜市の教員を目指す仲間が多くできたことは心強く、大学で学び合った同期とはまた違う大切なつながりを得られた。

院友とのつながりから生まれる活力

〇〇

現在の勤務校では5年生の学年主任を務める多忙な毎日の傍ら、渡瀬さんは本学を卒業した横浜市の教員で組織する「横浜市学校院友会」の副会長職を担う。院友名簿や会費の管理のほか、毎年開かれる総会と懇親会の運営が主要な仕事だ。

「横浜市の学校に関わる院友の仲間がこんなにたくさんいるのだという力強さを感じる。自分が小学生の頃から先生をしている先輩方の話はとても心に刺さる。一方で新規採用になった皆さんも毎年、総会にあいさつに来てくれるので、ともに頑張っていこうという一体感が生まれる。同じ大学で学んだ人と人とのつながりを感じ、自分自身も活力をいただいている」と渡瀬さんは会の要職を務めることのやりがいを語る。

みんなで増やそう 成果のキラキラ



渡瀬さんが担任を務める5年2組の教室に掲げられている掲示物。授業や行事などクラスのみんなで頑張って成果が上がると、金色の「キラキラ」が増えていく



より良い社会に変えていく

協力

恩師との出会い、部活での実践—— 大学生活での学びが教員人生の土台に

——大学で宮川八岐・元人間開発学部教授のゼミナールに所属し、「特別活動」についての研究を深めたのはなぜか

「特別活動」とは何か、一般には分かりにくいかもしれないが、メインは学級活動、いわゆる「学活」の時間だ。子どもにとって最大の教育環境は教員だ。分かりやすい授業を行うことはもちろん大事だが、担任として子どもと共に学級をつくっていく学級経営について深く学びたいと思っていたところ、国学院大学にすばらしい教授がいることを知った。それが宮川先生だった。文部科学省の教科調査官として特別活動を専門とし、さらに教科領域を超えて視学官を務めた経歴の持ち主で、普通なら出会えないような人に教えていただいた。これもまた運命的なことだと思う。

これも特別活動を理解していないと、好き勝手に子どもと遊んでレクリエーションをして終わり、となりかねない。こんな活動がしたいという子どもたちの「思い」や「めあて」に教員の「ねらい」を乗せ、その活動を通してどんな資質・能力を身に付けるのかという計画が必要だ。教員13年目になった現在も特別活動の研究を続けている。学級づくりの中核となる部分を「宮川ゼミナール」で学ばせてもらったと思っている。

——大学での学びが現在のキャリアの土台になっているのか

入部当時、2年生は1人、3年生は3人という少人数だった。スポーツ推薦の1期生として入部した私たちが新しい部の伝統を築き上げていく役割を担うことになった。部員各自のこれまでの取り組み方と目指す方向性が異なり、部員同士が衝突することも多かった。私はチームをまとめるキャプテンとして、部員同士を「つなぐ」役目を心がけた。学年や部全体で何度も話し合い、共通の目標をみんなで決めていくことで、問題を解決することができた。その時の経験は現在の仕事にも非常に生きている。宿泊体験学習や運動会など、一つの活動をつくり上げるために教職員がチームとなって動く場面が学校の現場には多くある。緻密な計画を立てた上で話し合いを何回も重ね、見通しを持ち、子どもたちとも話しながらみんなの思いを乗せていく。そういった一つの組織、一つの活動をつくり上げるという意味では、部活動での経験は実践的な学びになっていたと思う。

——故郷の小学校で臨んだ教育実習で得たものは
故郷の小学校で過ごした教育実習の4週間は決して忘れられない日々だ。当時の私は「子どもの気持ちに寄り添うことができる先生になりたいな」先生になった。たまたま恩師が喜ぶだろうな」といった漠然とした思いで教員を目指していたが、いざ実習で子どもたちを前にし、工夫して行った授業で子どもたちの「できた」「分かった」という表情を見た時、子どもたちと一緒に自分自身も成長できるのだという実感を得た。もともと私は、自分のために努力するというより人のために努力し、喜んでもらえることが巡り巡って自らに返ってくるという考え方だ。教育実習を経て意識が変わり、人のためではなく自分のためにも教員になりたいと強く思うようになった。

——現在、教員として子どもたちや保護者、さらに社会に対してどのような貢献ができていると思うか

学校という場には、社会と同じように多様な子どもたちが一つの教室で生活している。この環境の中で、より良い学級生活をつくり出すことが教員としての務めだ。私が一番大事にしていることは、子どもと子どもを「つなぐ」ということ。これからの予測困難な社会を生き抜くには他者との協働が不可欠だ。その協働する力を学ぶのが学校だと思える。日々の活動づくり、授業づくりがいずれ子どもたちにとって生活をつくり上げていく、人生を切り開いていく、より良い社会に変えていく、そのような力につながると思っている。子どもたちと接している。

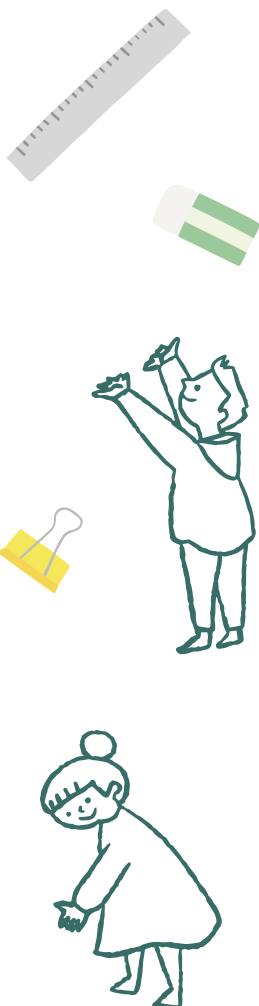
——小学校の先生になって良かったと思う瞬間は

やはり子どもたちの「できた」「分かった」といううれしそうな表情を見る時だ。目の前で子どもが成功体験をつかみ取っている瞬間を見られることは教員ならではのやりがいだと思う。また、低学年の時に担任をした子どもが高学年になって別の担任のもとで頑張っている姿を見ると、その子どもの人生の一部分に寄り添えたと思うことがあつた。未来につながる子どもたちのために、自分は今働いているのだと、最近よく感じる。

エピソードを一つ紹介したい。最初に勤めた学校の3年目、初めて6年生の担任をした。彼らは驚くほど大人びており正直、初めて6年生の担任をする自分が対応できるかという不安を感じたが、子どもに寄り添い、子どもと一緒に学級をつくっていくことを大事にし、手探りで努力した1年間だった。当時のクラスの児童が小学校の教員を目指して国学院大学の人間開発学部初等教育学科に入学した。現在4年生で横浜市の教員採用試験にも合格した。かつての教え子が担任であった私に憧れて教員を志望し、大学の後輩になり、そして今度は同じ横浜市の教員として同僚になる。これもまた私には運命的な出来事だ。

——最後に教員を目指す後輩たちにアドバイスを

教員は子どもの成長を間近で感じられる本場にやりがいのある仕事。子どもたちのために努力を重ねる日々がある一方で、子どもから学ばせてもらうことも多く、人としての大きな成長が自らに返ってくる。かつて先輩の教員に言われて心に残っていることが「初任の教員も、10年から20年の経験豊富な教員も、日々抱える悩みに大きな差はない」という言葉。経験や知識があっても、必ずしも順調に進むとは限らない。子どもと向き合い取り組む過程で、むしろ経験を積んだ教員が経験年数の浅い教員から教えてもらうことも多い。学校の現場はチームで動いている。どの学校にも助けてくれる先輩教員が必ずいるので、ぜひ前向きな気持ちで教員を志してほしい。ともに働く仲間が増えることを願っている。



人間開発学会第17回大会 研究成果と知見を共有



冒頭、太田直之・人間開発学会会長（人間開発学部長・同教授）は、「本年も非常に多く研究発表のエントリーがあり、特に学生たちに参加いただいていることは大変喜ばしく思う」とあいさつ。

第1部の研究発表では、学生会員による発表4演題と教員ら3演題の計七つの多様な研究成果が披露され、学生からは、健康・スポーツ科学分野を中心とした研究が発表された。第2部では、研究代表者の長田恵理・初等教育学科教授と、大矢隆二・健康体育学科教授が「教員養成課程における模擬授業の在り方」と題し、学部共同研究の成果を報告。第3部では、令和6年度国学院大学人間開発学会研究奨励賞の表彰が行われた。受賞した中野圭祐・子ども支援学科助教が記念講演「手遊び歌実演方法による子どもの夢中度の違い…熟達保育者と非熟達保育者の比較」を実施し、手遊び歌の実演を交えた発表を盛り上げた。第4部では、第1部で行われた学生の四つの発表の中から、堀寛太さん（健体2）の発表「リーグ戦前後の大学野球投手における身体的変化」が学生研究発表奨励賞を受賞し、表彰されたII写真。

本大会が今後も人間開発学の発展に寄与するものと期待される。

学生部企画 お月見祭を開催



学生部が企画するお月見祭が10月7日に渋谷キャンパスで開催された。この催しは収穫への感謝と豊穣を祈る「月見」にちなみ、在学生が古くからの日本の風習を体験し、季節の移ろいや文化の背景に思いをはせることを目的に学生イベント企画リーダーが運営を担当して開催している。今年は400人を超える学生が参加した。

昼休みの時間帯には、餅つき体験II写真IIと、試食会が行われた。先着順で15人の学生たちが餅つき体験に参加。参加した学生たちは順番に杵を持ち上げ、掛け声とともに力強く餅をついていた。試食会ではつきたての餅が振る舞われ、参加者や授業終わりの学生たちが堪能していた。餅つきに参加した学生は「杵が想像していたよりも重かったのが驚いた。自分で餅つきをしたのは初めてだったのでいい思い出になった」と話し、「自分でついた餅は特別おいしかった」と笑顔を見せた。

午後6時から、月が一年で最も大きく見えるスーパームーンを、天文同好会カノープスの協力のもと、天体望遠鏡を使用して鑑賞し、先着100人限定で「月見」だんごならぬきびだんごを配る予定だったが、あいにくの空模様で、「月見」は中止となった。学生たちは、中止を惜しみながらも用意されていたきびだんごを受け取り、「月見」の風習を楽しんだ。

インフォダイジェスト

…在学生 内容 講師 日にち 時間 場所 対象 定員 料金 申し込み 問い合わせ
…保証人 …卒業生 …一般 …受験生

大学からのお知らせ

「指定寄付金」ご協力をお願い

内学校法人国学院大学では、私学としての公共性と独自性のある教育研究体制を確立するため、広く寄付を募っています。寄付の種類は、「学生・生徒等の奨学基金」「学生・生徒等の活動支援」「教育・研究振興支援」「施設・設備充実支援」の四つに加え、学生の課外活動を支援するための「課外活動支援（スポーツ強化部会など）」や「メッセージ募金」を設けています。「メッセージ募金」は、スポーツ活動や課外

活動などに熱心に取り組む学生に向けて、HP上からメッセージを直接投稿してもらう仕組み。ワンコイン（500円）から寄付が可能で、メッセージはそのまま専用HPに公開されます（匿名可）。

申専用紙またはインターネットでのクレジットカード決済が可能です。

問総務課（☎03・5466・0111）

※本法人への指定寄付金は税制上の優遇措置を受けることができます。募金に関する情報は専用HP（二次元コード）で閲覧できます。



令和7年度学費等納付金について

内令和7年度学費等納付金（後期）口座振替日は、11月26日(水)です。詳細は、10月下旬に発送した「学費等納付金納入のお願い」や大学HPをご確認ください。

問経理課、学生生活課、たまプラーザ事務課、大学院事務課



キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPY II から行ってください

模擬面接指導会

内採用選考の面接では、フィードバックがないため、どこが良くてどこが悪かったかが分からず、同じ過ちを繰り返してしまう危険性があります。本指導会は企業の採用担当者を招いて、実践的なアドバイスがもらえる貴重な機会です。面接力強化のために積極的に参加しましょう。

日11月19日(水)13時30分～17時15分

対3年生、博前1年次

SPI非言語対策講座

内筆記試験は、頻出分野の問題を確実に解けるようになることが選考突破に向けたポイントとなります。本講座ではレベル別に1日で広範囲を一気に学習し、誰でも簡単に答えが出せる解き方を解説します。

日11月8日(土)、22日(土)

対2～3年生、博前1年次

合同企業セミナー

内10月から開催している合同企業セミナーはこの5日間で終了です。15社出席を目標に参加しましょう。

日10月22日(水)、29日(水)、11月12日(水)、26日(水)、12月3日(水)

対1～3年生、博前1年次

イベント

30

令和7年度 オンライン公開講座① 「日露関係の前史 17世紀から18世紀までの環オホーツク海地域の歴史」

内18世紀末にはロシアが正式な外交使節を日本に派遣しており、日露両国では17世紀の末から漂流者、先住民、オランダを情報源として、環オホーツク海地域についての知識が蓄積されていました。本講座では、この17世紀から18世紀までの環オホーツク海地域の歴史を東北アジア史の一部として概観します。

講神長英輔（国学院大学文学部教授）

日配信中～12月31日(水)

料1,500円（1回60分）

申12月24日(水)まで。専用HP（二次元コード）から申し込み

問エクステンションセンター（☎03・5466・0270、jigyoku@kokugakuin.ac.jp）



令和7年度 オンライン公開講座② 「美容産業と都市 美容師はどのように都市空間を動くのか 経済地理学入門」

内経済地理学は経済現象を空間の中で理解する学問です。この講義では、身近な例として美容産業、とりわけ美容室と美容師に着目して、経済地理学の考え

方を紹介します。

講山本健太（国学院大学経済学部教授）

日配信中～12月31日(水)

料1,500円（1回60分）

申12月24日(水)まで。専用HP（二次元コード）から申し込み

問エクステンションセンター（☎03・5466・0270、jigyoku@kokugakuin.ac.jp）



令和7年度 文化講演会 「ことばの灯をつなぐ——古典文学から紐解く昔と今」

内数々のメディア書評活動でご活躍の三宅香帆氏と、本学院友であり、卒業後もさまざまな分野でご活躍の宮田愛萌氏（令2卒・129期日文）をお迎えし、お二人自身の執筆活動や本・文学にふれるきっかけ、さらには現代における古典文学の魅力、解釈について見つめ直します。

日11月15日(土)14時～15時30分

場渋谷キャンパス常磐松ホール

定280人

料無料

申11月7日(金)まで。本学HP（二次元コード）から申し込み

問エクステンションセンター（☎03・5466・0270、jigyoku@kokugakuin.ac.jp）



ゼミやインターンシップで経験を重ね、 高輪ゲートウェイシティの まちづくりに参加

山野井かりんさん（観まち4）は、観光まちづくり学部で学ぶことで、旅やまちづくりに対する価値観が大きく変わったと語る。知らない土地や人々との出会いを重ねる中で、新たな自分や可能性を見いだしてきた成長の過程をうかがった。

山野井かりんさん（観まち4）



幼い頃から家族と共に旅先で豊かな自然を楽しみ、旅が大好きになった山野井さん。国学院大学観光まちづくり学部の【地域を見つめ 地域を動かす】とのキャッチコピーに引かれて入学した。最初に印象に残った学びは、2年生で参加したインターンシップだ。夏に新潟県の一之貝集落を訪れたことをきっかけに地域の方々と親しくなり、継続して訪問するようになった。冬には、淡路島の洲本にて、地域おこし協力隊と一緒に空き家の改修やイベントの手伝いをした。大手の開発とは違う、個性ある空き家活用の取り組みは、まちづくりについて考える転機になった。3年生の夏には沖縄の国頭村に滞在し、地域のために働く人々の情熱に感銘を受けた。

さらに国境をも越えて、世界は広がっていく。2年生のスタディツアーのタイ訪問が初の海外。心配性の性格を克服しようと一人でラオスにも出かけた。その後ゼミでカンボジアとベトナムに滞在すると、もう慣れたもので、インドにも一人旅をした。

訪れた先々で、人々の優しさや地域に対する思いに触れ、多くの学びや気づきがあった。特に「自分とは違う価値観や目標を持っている人たちと出会うことで、将来の選択肢が広がり、新たな自己発見も

できる。これこそが旅だと考えるようになりました」と語る。

数々の経験を重ねた3年生の3月、大学職員の紹介で高輪ゲートウェイシティのまちづくりに関わることになる。

「令和7（2025）年3月に開業した高輪ゲートウェイシティは国内最大級のまちづくりプロジェクトで、私はその中のオープンスペース『Gateway Studio』でコミュニケーターをしています。ここは皆さんの“やりたいこと”の種を育む畑のような場所。誰かの“やりたいこと”は、誰にとっても“良いこと”につながる、という思いのもと、ここでの活動全体を“TAKANAWA GOOD”と呼んでいます。来場者の“やりたいこと”を実現する筋道を一緒に考えることが、コミュニケーターの主な仕事です」

“やりたいこと”は“WISH”と呼び、WISHカードに書いて他の来場者とシェア。それを見て共感する人が集まったグループは“BEANS”と呼ばれ、小さな部活動のような存在として活動している。山野井さんもBEANSを持っているそうだ。

「私は一人居酒屋が好きで、高輪のおすすめの居酒屋を紹介してほしいというWISHカードを掲示した

ところ、地図を作りたいというWISHの方がいて、二人のWISHを掛け合わせて“高輪ご近所BEANS”が出来上がりました。いずれは、来場の方々にもBEANSをつくっていただけたらと思いながら活動しています」

しかし、オープンスペースであるがゆえに、休憩するだけ、展示されている模型を見学するだけの人が多いのが実情という。「ここに来れば誰かがいて話もできる。人と人がつながっていける場になってほしい」と工夫もしている。

「絵しりとりを試みてみました。すると、初対面でも何会話の種がなくても自然と話が広がるのです。『待ち合わせで来たのに、楽しかった』と言ってくださる方もいて。そういった関係性の積み重ねで、この場所を使ってみようかなと思ってくれる人が増えていくのではないかと期待しています」

目を輝かせて話すその様子からは、山野井さんが人と関わることを心から楽しんでいることが伝わってくる。「観光まちづくり学部で学んだことで、予想もしていなかった経験がたくさんできました。将来は人に関わりながら新たな価値を生み出す仕事がしたいです」と笑顔で語る山野井さん。その笑顔は、誰をも明るく元気にするすてきな力を持っている。

インタビューの詳細は「国学院大学メディア」で公開予定

硬式野球部



中央大学戦でソロホームランを放った落合選手

東都大学野球 秋季リーグ戦開幕 第3週を終えて勝ち点2で終盤戦へ

東都大学野球秋季リーグ戦が9月16日、ジャイアンツタウンスタジアム（東京都稲城市）で開幕した。国学院大学硬式野球部は第3週までを終え、勝ち点2を獲得し、終盤戦に臨む。

第1週は青山学院大学と対戦。2試合とも打線が振るわず、初戦を1-2、2戦目を0-2で落とし、黒星スタートとなった。流れを変えたい第2週は東洋大学と対戦し、9月24日の第1戦は、五回裏に主砲の渡辺嶺選手（健体4）がソロ本塁打を放ち先制したものの、逆転を許す苦しい展開となった。九回裏には緒方漣選手（健体2）が起死回生のソロ本塁打を放ち土壇場で同点に追いつき、試合は延長タイブレークへ突入した。十回裏に落合俊介選手（法4）が決勝タイムリーヒットを決め、劇的なサヨナラ勝ちで初戦をものにした。翌日の第2戦も延長タイブレ

ークにもつれ込む熱戦となったが、十回表に連打と相手のミスで一挙4点を奪取し、5-2で勝利。見事勝ち点1を獲得した。

第3週は中央大学と対戦。10月7日の第1戦は、三回表に田井志門選手（健体3）が三塁打を放ち、無死三塁とすると、続く赤堀颯選手（経営3）の適時打で先制した。投げては、先発の當山渚投手（経営4）が9回を無失点に抑える快投で勝利を収めた。翌日の第2戦は、一回裏に先制点を許す展開になったが、二回表に3点を奪い逆転。五回表には落合選手のソロ本塁打が飛び出すなど打線が機能し、七回表にも3点を加え7-1と快勝した。

この第3週を終え、国学院大学は勝ち点2を獲得。確かなチーム力を発揮し、上位を目指してリーグ戦終盤に挑む。

ソフトテニス部

令和7年度全日本学生選手権大会（第79回文部科学大臣杯全日本大学対抗ソフトテニス選手権大会、第80回三笠宮賜杯全日本学生ソフトテニス選手権大会〈ダブルス〉、第67回全日本学生ソフトテニスシングルス選手権大会）が8月29日から9月3日まで、千葉県総合スポーツセンター庭球場（千葉市稲毛区）などで開催された。国学院大学ソフトテニス部女子は、大学対抗戦、シングルスで3位入賞という輝かしい戦績を収めた。

女子の大学対抗戦では、濱島怜奈選手（初教4）・鈴木叶選手（中文3）、寺澤佑珠妃選手（日文4）・高嶺心萌選手（中文4）、鈴木心菜選手（子支4）・庭田

咲月選手（神文1）の3ペアが出場し、粘り強さを武器に試合を優位に進め、準決勝へと進出した。準決勝では、前回優勝校である日本体育大学と対戦。どの対戦も一進一退の攻防となり、選手たちは全力を尽くしたが、0-3で敗戦し、3位入賞となった。

シングルスでは、庭田選手が初出場ながら、並み居る選手を次々と倒し、準決勝へと進出。準決勝ではこの大会で最終的に優勝した選手に敗れたものの、見事3位入賞を果たした。

今回の結果は、日ごろの厳しい練習の成果であり、今後のさらなる飛躍とリーグ戦での活躍が期待される。



団体3位入賞を果たした選手たち

柔道部

荒川選手 世界ジュニア 個人銀、混合団体金
国内大会でも3選手が入賞

荒川選手（後列左から3人目）と男女混合団体優勝チームの選手たち（柔道部提供）



2025年世界ジュニア柔道選手権大会が10月5日から8日にかけてリマ（ペルー）で開催され、国学院大学柔道部の荒川琉生選手（健体1）が男子73kg級の日本代表として出場し、銀メダルに輝いた。

この大会は、国際柔道連盟が毎年（オリンピック開催年除く）開催している15歳以上21歳未満の選手の世界一を争う大会。6日に行われた男子73kg級

には、31カ国から41選手が参加した。荒川選手は1回戦、2回戦ともに一本勝ちを決めるなど、安定した試合運びで順調に勝ち進んだ。3回戦は相手選手の反則で勝利し、準々決勝、準決勝は一本で勝ち上がり、決勝に進出した。決勝ではタジキスタン代表に惜しくも敗れたが、世界の舞台で堂々たる戦いぶりを見せ、銀メダルに輝いた。

荒川選手は、8日に行われた男女混合団体にも出場し、日本チームの金メダル獲得に貢献した。準決勝のブラジル戦では2番手で出場し後袈裟固めによる一本勝ちを決め、チームとしても4-0で勝利した。迎えた決勝のフランス戦では1番手で出場し敗れたものの、その後に続く選手が4連勝し、日本チームは優勝を果たした。

ほかにも、2025年度全日本ジュニア柔道体重別選手権大会が9月13、14日の両日、リプロ武道館（埼玉県上尾市）で開かれた。国学院大学柔道部からは、60kg級で吉村悠之介選手（健体1）、66kg級で大柿将馬選手（法1）が、それぞれ3位入賞を果たした。両選手は安定した組み手と粘り強い試合運びで実力を発揮し、順調に勝ち進んだ。3回戦で惜しくも敗れたが、敗者復活戦を勝ち抜き、堂々の3位となった。

また、9月27、28日には、体重別の学生日本一を決める2025年度全日本学生柔道体重別選手権大会が日本武道館（東京都千代田区）で開催された。60kg級に出場した宮部真臣選手（観まち4）が準優勝の活躍を見せた。宮部選手は初戦、2回戦とともに一本勝ちで勢いに乗り、決勝まで進出。決勝では、天理大学の横井蓮選手に大外刈りで有効を取られ惜しくも敗れたが、結果を残した。

陸上競技部

出雲駅伝で2年連続優勝
通算3度目の栄冠をつかみ、3冠へ視界良好

大学駅伝シーズンの開幕戦となる第37回出雲全日本大学選抜駅伝競走が10月13日、出雲大社（島根県出雲市）正面鳥居前から出雲ドーム前を結ぶ全6区間45.1㌔のコースで開催され、国学院大学陸上競技部は大会2連覇を達成、通算3度目の優勝を飾った。

気温26度、湿度60%を超えるコンディションの中、選手たちは出雲路を懸命に駆け抜けた。1区の青木瑠郁選手（健体4）はスピードランナーがそろった集団の後方から冷静にレースを進め、終盤には一時先頭に立つ積極的な走りを見せ、2区の尾熊迅斗選手（健体2）へ5位で襷をつないだ。尾熊選手はスピードを生かし、追い上げを図る他校の選手をかわしながら粘りの走りで順位を維持した。3区の野中恒亨選手（健体3）は各校のエース級や外国人留学生が配置される重要区間で、彼らと互角に渡り合う力強い走りを見せ、チーム順位を2位まで押し上げ、トップとの差を詰めた。流れを決定づけたのは4区の辻原輝選手（史3）。先頭を走っていた早稲田大学の選手をかわすと、そのまま独走態勢を築き、後続に一切つけ入る隙を与えない区間新記録の快走を披露。この区間で2位以下を大きく引き離れた。5区の高山豪起選手（法4）も小刻みなアップダウンが続く難関区間をものともせず、さらに2位との差を広げ、最終6区の上原琉翔主将（健体4）へ襷を託した。上原主将は、早稲田大学の追い上げを受けながらも、チームメートからの声掛けや、沿道の声援を

力に変え、最後までペースを落とさずにゴール。2位に38秒差をつける圧倒的な勝利で2連覇を達成した。

優勝にあたり、前田康弘監督は「選手たちが見事に期待に応えてくれた。混戦を予想していたが、国学院らしさを出して優勝することができた。次の全日本、箱根駅伝も優勝を目指していく」と今後の意気込みを語った。上原主将も「前を走った5人に感謝している。キャプテンとしてみんなに伸び伸びやらせてあげたことで、チームとして成長することができた」と笑顔を見せた。

本学は2年連続でシーズン初戦を制し、駅伝3冠へ向け好調なスタートを切った。11月2日には、秩父宮賜杯第57回全日本大学駅伝対校選手権大会が熱



1位でゴールテープを切る上原主将（写真・月刊陸上競技）

田神宮西門前（名古屋市）から伊勢神宮・内宮宇治橋前（三重県伊勢市）をつなぐ全8区間106.8㌔のコースで開催される。

総合成績 (8位入賞まで)		
順位	大学名	総合成績
1	国学院大学	2時間9分12秒
2	早稲田大学	2時間9分50秒
3	創価大学	2時間10分5秒
4	アイビーリーグ選抜	2時間10分12秒
5	駒沢大学	2時間10分27秒
6	城西大学	2時間10分41秒
7	青山学院大学	2時間10分52秒
8	帝京大学	2時間11分32秒

個人成績					
区間	氏名	所属・学年	タイム	区間順位	総合順位
1区	青木 瑠郁	健体4	23分42秒	5位	5位
2区	尾熊 迅斗	健体2	16分30秒	6位	5位
3区	野中 恒亨	健体3	23分49秒	2位	2位
4区	辻原 輝	史3	17分20秒 (区間新記録)	1位	1位
5区	高山 豪起	法4	17分58秒	2位	1位
6区	上原 琉翔	健体4	29分53秒	4位	1位